

蝦夷地測量はニシベツから引き返す

寛政12年8月3日 姉別で忠敬は手紙で頼んだ根室からの迎船を待っている。4日も船は来なかった。5日もだめ。いらいらしながら待っていた。

同六日 朝より晴天。年中太陽を測。七ツ頃ネモロの御詰合ニシベツへ御出役に付、ニシベツより迎船来候に付諸器仕舞候え共遅迎に付逗留。夜は少曇る。

6日になってようやく迎船がニシベツからやってきた。鮭漁のため根室の人間は皆ニシベツに来ているという。到着が遅かったので、さらに一晚泊まることにする。

同七日 朝より四ツ頃迄霧深し。それより晴天。朝五ツ後出立。川舟三里余フウレントウ、一里弱。それより草原平地十町ばかり行海岸に出、二十七町余ニシベツに九ツ過に着。仮家に止宿。此所は不残仮家なり。夜晴測量す。

このとおり現場をたどってみたが、仮家の位置がわからない。西別川の右岸か左岸か。記述に従えば右岸の可能性が高いが、地元の方のお話では右岸には当時人家がなく、客館だけだったという。

人家のある左岸は西別とはいわず、別海といった。伊能大図の天測の☆印は別海側にある。人の住んでいない側に宿泊というのも理解できないので、まだ結論は出ていない。

忠敬の聞き違い（西別で地名を聞いて、別海も同じと思った？）かも知れない。

ネモロ御詰合御勘定大嶋栄治郎殿、御普請役井上辰之助殿、同勤方村上治郎右衛門殿、此所へ御出役なり。ネモロへ罷越候儀を伺候所、当時鮭引網最中にてネモロより不残此方へ引越候間、ネモロ会所には人なしに候えば、ネモロより迎船又は送船等にては鮭漁獺にも人少にてこまり候間、ネモロへ罷り越不申候ても相済候はば何卒此所にて相済しくれ候様御相談に付、左候ばば当年はネモロは遠測に仕り、此より罷帰可申御挨拶申上げ人足並に渡船の儀を願候所、アツケシへ迎船を申遣候間、明八日逗留、九日に出立候様被仰候間逗留。八ツ後よりクナシリ島、ネモロその外方位を測る。

当時東蝦夷は幕府直轄で、ここには幕府役人が3人も詰めていた。旗本の御勘定から「人出が足りないので、根室に行かなくて済むようなら、そうしてほしいと」と丁寧に頼まれる。現場の繁忙を見て、諸方を遠測して引き返すことにする。

同八日 朝より晴天、此朝御詰合並支配人より飛脚を以アツケシへ我等出立に付迎船の触を出す。此方より先触を出す。

昼太陽を測、昼後より十間縄を以、クナシリ、ネモロ外所々の方位を測。夜は薄曇。

役人に帰る船の用意を頼んだあと、太陽の高度を測り、十間縄でクナシリ、根室の方位を測ったという。十間縄と出てくるのは珍しいのだが、方位盤から目標に対し縄を張り、これに沿って方位を測るのであろうか。途中に間棹を立てて、小方位、間棹、目標物を一直線に合わせても同じではないかと思うが、いかがであらう？